Osaka University Knowledge Archive

Title	国際化する狂言 ： 狂言台本翻訳の歴史をめぐって
Author(s)	Hýbl, Ondřej
Citation	大阪大学, 2010, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/57890
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

【43】

氏　　名	HÝBL ONDREJ（ヒェブル オンドレイ）
博士の専攻分野の名称	博　士（文　学）
学　位　記　番　号	第　２３４９７　号
学位授与年月日	平成22年３月23日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当 文学研究科文化表現論専攻
学　位　論　文　名	国際化する狂言－狂言台本翻訳の歴史をめぐって－
論　文　審　査　委　員	（主査） 教　授　天野　文雄 （副査） 教　授　永田　　靖　　教　授　市川　　明

論文内容の要旨

本論文は明治初年から現代までのおよそ100年のあいだに英語、ロシア語、チェコ語に翻訳された狂言の台本を対象に、その翻訳上の問題点や課題について検討し、能、歌舞伎、文楽とならぶ日本の代表的な古典劇である狂言の翻訳の歴史とあり方を考えようとしたもので、400字原稿用紙に換算して360枚の論文である。

本論文は４章からなり、第１章「狂言翻訳初期の三種の英語狂言集をめぐって」では、1907年に東京の東西社から刊行されたヨネ・ノグチ（野口米次郎）の『英語狂言10番』、1934年にシドニーのAngus & Robertson Limitedから刊行されたアーサー・L・サドラーの『日本の演劇』に収められた24曲の翻訳、1938年に刊行された『墨塗女（TheInk-smeared lady）』（1960年にタッツル社から再刊）所収の22曲の初期の翻訳３点を対象とし、第２章「狂言翻訳中期、スラブ圏の言語への翻訳をめぐって」では、1947年にプラハで刊行されたヴラスタ・ヒルスカーの『日本演劇』に収められた『花子』のチェコ語訳、1978年にプラハで刊行されたカルヴォドヴァー、ノヴァークの『松風』に収められた『千鳥』と『二人袴』のチェコ語訳、1976年にモスクワで刊行されたV．サノビチュ、M．ワクスマヘルの『東洋伝統演劇』に収められた『鼻取相撲』と『雁盗人』のロシア語訳を対象に狂言台本翻訳上の問題を考究している。また、第３章「ドン・ケニーの翻訳、ドナルド・キーンの翻訳」では、日本在住のドン・ケニーが1989年にジャパンタイムズから刊行した『狂言ブック－日本の伝統喜劇大系』に収められた22曲の翻訳、ドナルド・キーンのAnthology of Japanese Literature（New Yoyk､1955）に収められた『附子』の翻訳をもとに、両者の翻訳技法や理念を対比させつつ、狂言台本翻訳上の問題を考え、第４章「最近の狂言翻訳および外国語による狂言上演をめぐって」では、2007年発行のAsian Theatre Jour（ハワイ大学）の狂言特集をもとに、同誌に掲載されているローレンス・R・コミンズ（ポートランド大学教授）、アメリカで幽玄劇団を主宰するユリコ・ドイの狂言翻訳についての論文や、『清水』『末広がり』、新作狂言『濯川』の翻訳をもとに最新の狂言翻訳の状況を紹介し、最後に、申請者がこの10年間携わってきた、狂言をチェコ語で上演することをめざしたチェコ語への翻訳をめぐる経験を紹介している。

論文審査の結果の要旨

能・狂言と総称されるように狂言と兄弟関係にある能の翻訳としては、アーネスト・フェノロサが残した素稿をエズラ・パウンドが整理した仕事や、フランス人宣教師ノエル・ペリの翻訳などが著名であり、また戦後にあっては、ドナルド・キーン、ロイヤル・タイラーの翻訳などがレベルの高い翻訳として知られているが、狂言については、フェノロサ＝パウンドによる歴史的に著名な事例も知られていず、狂言の各国語への翻訳がいつから始まって、どのような経過をたどって現在にいたっているのか、その輪郭も明らかではなかったのだが、1907年のヨネ・ノグチによる翻訳を起点として、その後100年におよぶ狂言翻訳の歴史をたどった本論文は、まず、狂言翻訳史の概観という点で大きな意義を有していると評価できる。また、英訳のほか、ロシア語訳、チェコ語訳をも論の対象にしているのは、申請者がチェコ共和国の出身ということも与かってはいるが、本論文の持つ意義の--つとしてよいであろう。また、第３章と第４章の近年の狂言翻訳（すべて英訳）の動向分析においては、欧米人による英語での上演を念頭においた翻訳がなされていることを紹介し、そうした上演を視野に入れた翻訳が狂言翻訳のあるべき形だとしているが、これも狂言翻訳上の重要な問題についての指摘である。この第３章と第４章は、本論文のなかでも概して精彩を放っているが、そこではたんに狂言翻訳の傾向だけでなく、近年の欧米における狂言受容の高まりを伝えている点でも印象的である。このほか、個別的な事項では、初期のサドラーの翻訳の紹介、戦後におけるドン・ケニーの業績、『附子』など狂言の特色である「言葉の洒落」の翻訳の問題、フランスのファルスをもとにした新作狂言『濯川』翻訳が提起する狂言の演劇としての特質、原文のままの「翻訳しない翻訳」の紹介、などが注目される。

本論文は以上のような成果をあげているが、その一方、フランス語訳やドイツ語訳が対象になっ

ていないこと、申請者自身が実践するチェコ語での上演の影響からであろう、上演という視点からの考察にくらべて、戯曲としての翻訳という面がやや物足りない。そういう問題はあるが、本論文は明治以降の狂言の翻訳の歴史を概観し、近年著しい狂言の国際化の一事例としようとした点で大きな成果をあげており、よって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。